

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	しながくどう福岡東(保育所等訪問支援)		
○保護者評価実施期間	R7年2月25日		～ R7年3月24日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	20	(回答者数) 10
○従業者評価実施期間	R7年2月25日		～ R7年3月24日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	3	(回答者数) 3
○訪問先施設評価実施期間	R7年2月15日		～ R7年3月24日
○訪問先施設評価有効回答数	(対象数)	13	(回答数) 8
○事業向け自己評価表作成日	令和7年3月29日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	保育所等訪問支援の目的や支援内容について、保護者・訪問先・職員間で丁寧な共有を行い、支援内容の透明性と納得感を高めています。保育所等訪問支援は、訪問支援員だけでなく保護者や訪問先施設(園・学校)の職員との三者連携のもとで成り立つ支援です。当事業所では、支援開始時に限らず、日々の訪問の中でも支援目的や内容を明確にし、丁寧に共有することを意識しています。そのことにより、支援の方向性に対する保護者の理解と安心感、訪問先施設の協力体制が得られ、支援内容が実施現場にとって実効性のあるものとして機能しやすくなっています。	保護者・訪問先施設・職員間での丁寧な情報共有と合意形成により、支援への納得感と安心感を高めています。支援開始前の面談や定期的な連絡調整の場を通じて、保護者・担任・支援員の三者が支援の方向性を共有し、共通理解を図っています。こうした丁寧なコミュニケーションにより、保護者には安心感を、訪問先施設には協力しやすい環境を提供でき、結果として子どもにとっても安定した支援につながっています。	支援の内容や成果を蓄積・共有するためのデジタルツールの導入や、記録様式の統一化を進めています。支援の記録やアセスメント結果などの情報を蓄積し、支援の継続性と一貫性を高めるために、デジタルツールの導入を検討しています。また、記録のばらつきを減らし、誰が見ても分かりやすい形で支援経過を共有できるように、記録様式の統一化を進めることで、チーム内の情報共有と引継ぎの質を高めています。
2	支援前後のアセスメントや振り返りを通じて、支援の質を高める取り組みを継続しています。当事業所では、支援を「実施して終わり」にせず、支援の前後にアセスメントや振り返りの時間を設けています。支援前には、子どもの状態や訪問先での状況を把握し、その日の目的や関わり方を明確にしたうえで支援に臨んでいます。支援後には、子どもの反応や関係者の声、支援員の気づきを記録・共有し、次回への改善点を洗い出すことで、PDCAサイクルを回しています。こうしたことが積み重なることで、支援の精度や対応力が高まり、子どもにとってより適切で効果的な支援へとつながっています。	訪問前後の打ち合わせや定期的な話し合いを通じ、支援の修正や質の向上を図っています。訪問当日は、支援の前に目的や支援内容の確認を行い、支援後にはその日の様子や課題、気づきを共有しています。また、定期的な話し合いを通して保護者・施設・支援員の間で現状を振り返り、必要に応じて計画の修正を行っています。これにより、支援の内容が常に現状に即したものとなり、支援の質の向上にもつながっています。	保護者支援の拡充を図り、家庭での関わり方に関する提案を計画的に行っています。支援の効果を高めるためには、家庭での関わり方や保護者の理解も重要な要素となります。そのため、面談の機会を設けたり、子どもの特性に応じた関わり方のヒントや具体的な支援例を盛り込んだ資料を提供するなど、家庭支援を計画的に充実させることを目指しています。
3	訪問先施設や家庭と良好な連携を保ち、信頼関係を構築しながら支援を実施しています。訪問支援の効果高めるためには、訪問先施設との信頼関係と協力体制が不可欠です。当事業所では、訪問支援員が単独で支援を行うのではなく、担任の先生や関係スタッフと事前・事後に丁寧にやりとりを重ね、相互の役割を確認しながら進めています。また、家庭との連携も重視し、保護者への支援内容のフィードバックや面談、連絡帳や電話等を通じた情報共有を行うことで、家庭での支援にもつなげています。	支援内容の記録や計画書の内容が、本人の特性に即したものとなるよう、職員間で意見を出し合いながら調整しています。一人ひとりの子どもに合わせた支援を行うために、支援記録や評価内容は形式的なものにとどめず、現場での観察や気づきを反映させることを重視しています。支援員同士が記録をもとに意見交換を行い、必要に応じて支援方法を柔軟に調整することで、子どもにとって意味のある、実行可能な支援を実現しています。	専門職間での支援技術の共有・相互フィードバックを促進し、より専門性の高い支援を実施する体制を強化していきます。支援の質を高めるため、職種を超えた意見交換や事例検討、相互フィードバックの場を設け、各職員が持つ専門性をチーム全体で活かす取り組みを計画しています。このような取り組みにより、子どもの多様なニーズに柔軟かつ専門的に応えられる支援体制の強化につなげていきます。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	職員間で支援内容の共有やアセスメントの視点にばらつきがあり支援の質に差が出る場合がある。訪問支援においては、子どもの状態や環境、特性に応じたきめ細やかな支援が求められますが、職員ごとの支援経験や評価の視点に差があることで、支援に反映される内容にもばらつきが生じる傾向があります。結果として、質に差が出てしまう場合があり、支援の一貫性や実効性に影響を与える可能性があります。	支援内容にばらつきが生じる背景には、職員の専門分野や経験年数の違いによるアセスメント視点の個人差があります。また、支援計画作成に関する基準や手順が十分に整備されておらず、各職員が独自の判断で記述・実施している点も要因の一つです。さらに、業務多忙により支援記録の相互確認やすり合わせの機会が限られ、職員間の情報共有や振り返りが不十分であることが、支援の一貫性の欠如につながっていると考えられます。	支援の質と一貫性を高めるために、アセスメントや個別支援計画の記載ルールを標準化し、共通様式やマニュアルを整備します。また、記録の蓄積と見直しを習慣化するため、定期的な振り返りやケースカンファレンスを実施し、職員間の相互フィードバックを促進します。さらに、クラウド活用やチェックリストの導入など、デジタルツールを活用しながら業務負担を軽減し、支援の質の向上を図っていきます。
2	支援の継続性や振り返りの一貫性が課題である。支援後の評価、振り返りの内容が職員個人に委ねられている部分が多く、支援方法の視点に差が生じています。	支援記録やアセスメントの内容が蓄積されても、それを職員間で定期的共有し、省察の材料として活用する体制が十分に整っていないことが課題です。日々の記録が形式的なものに留まりやすく、実践的な学びや支援方法の見直しに活かしきれていない状況があります。	記録やアセスメントの内容を活用するために、定期的なケース会議やミニミーティングを設け、職員全体で支援内容を振り返る機会を明確に確保します。また、気づきや学びを共有しやすくするために記録様式を見直し、実践に活かせる形式での運用を検討します。